

## 第 5 回

# 県立高等学校将来構想審議会

平成 2 1 年 2 月 1 2 日 ( 木曜日 )

1 0 : 0 0 ~ 1 2 : 0 0

## 1 開 会

司会 本日は、お忙しい中「第5回県立高等学校将来構想審議会」にご出席を賜りありがとうございます。

初めに、会議の成立についてご報告申し上げます。本日は、朴澤泰治委員、小澤仁邇委員の2名から、所用のため欠席する旨のご連絡をいただいております。従いまして、18名のご出席をいただいておりますので、県立高等学校将来構想審議会条例第4条第2項の規定によりまして、過半数の委員にご出席いただいておりますので、本日の会議は成立しておりますことをまずご報告申し上げます。

次に、本日の会議資料でございますが、次第、その後に出席者名簿と座席表がついております。資料といたしましては、資料1から資料3までございまして、資料1につきましてはA4判で10ページになっております。資料2でございますが、これは23ページまでございます。最後に資料3ですが、スケジュール案ということで1枚ものを添付しております。資料について不足等ございませんでしょうか。

引き続きまして、マイクの使用方法でございます。これまでと同様でございますが、ご発言の前には委員の皆様の前面にございますマイク右下のマイクスイッチをオンにいただきまして、マイクのところにオレンジ色のランプが点灯してからご発言をお願いしたいと思います。合わせまして、ご発言が終わりましたら、大変恐縮でございますが、スイッチをオフにいただきませうよろしくお願い申し上げます。

それでは、ただいまから第5回県立高等学校将来構想審議会を開会いたします。

開会に当たりまして、宮城県教育委員会教育長小林伸一よりご挨拶を申し上げます。

小林教育長 おはようございます。教育長の小林でございます。審議会の開会に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。

各委員の皆様方にはご多忙のところご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

前回までの審議会におきましては、現将来構想による高校改革の状況や、これからの時代に求められる人材像、そのための教育の在り方、県民意識調査の考察と高等学校の学科構成の将来像等につきまして、委員の皆様から貴重なご意見、ご提言を伺いました。

先日、公立高等学校の平成21年度入試に関する予備調査結果が発表されました。中学生は高校入試の時期を迎え、それぞれ自分の夢と希望の実現に向けて必死に勉学に取り組んでいるところでございます。県教育委員会といたしましては、こうした子どもたちの夢と希望に応えるべく時代や環境の変化に的確に対応しながら、今後の望ましい高校教育の具現化に努めてい

かなければならないと思っております。

本日の審議会では、前回に引き続き今後の学校や学科構成の在り方、生徒数に対応した高校配置の方向性等についてご審議をいただく予定でございます。本日も忌憚のないご意見、ご提案を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

司会 本日の出席者でございますが、時間の都合上、大変恐縮ですが、お手元の出席者名簿及び座席表に代えさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。

## 2 議 事

### (1) 社会の変化や生徒の多様化に対応した学校・学科構成等の在り方について

司会 それでは、これより先は荒井会長に議事進行をお願いしたいと思います。荒井会長、よろしくお願いをいたします。

荒井会長 それでは、早速議事に入りたいと思います。

本日の議事は、先ほどご紹介がありましたように2つございます。お互いに非常に関連したものでございますが、まず議事の(1)社会の変化や生徒の多様化に対応した学校・学科構成等の在り方についてということでございますが、前回の審議会で皆様のご意見を頂戴いたしまして事務局の方で整理を進めていただきました。まず、その説明を事務局の方からしていただきまして、その後その説明に対する質疑の時間を少しとらせていただきたいと思います。引き続き、議事(2)生徒数減少に対応した高校配置の在り方についてということで、これもまた資料がございますので事務局の方からの説明をお願いいたしまして、議事(1)と議事(2)をまとめて審議を進めていきたいと考えております。円滑な議事進行にご協力くださるようお願いいたします。

それでは、議事(1)につきまして、新たな資料もございますので事務局の方から説明をお願いいたします。

安住室長 では、資料1を説明させていただきますが、資料1の説明の前に、今会長からありましたけれども、今回の審議会でご審議いただく内容につきまして簡単に説明させていただきます。

昨年の12月に開催いたしました第4回の審議会におきましては、11月に実施いたしました「高校教育に関する県民意識調査」の結果報告と「新しいタイプの高校、学科の在り方」について説明し、貴重なご意見をいただいたところでございます。本来であれば、いただいたご

意見を踏まえまして新しいタイプの高校あるいは学科につきまして、事務局の考え方を整理すべきところがございますけれども、後ほど説明いたしますが、学科等の在り方につきましては、各地区の生徒の減少あるいは高校配置の状況を抜きにして議論することは難しいところがありますので、今回は新しいタイプの高校あるいは学科の在り方について事務局の考え方を整理しないまま、議論を一步先に進めさせていただき、生徒数減少に対応した高校配置の在り方等についてご議論いただきます。その後、皆様のご意見を踏まえまして、学科等の在り方について、事務局の考え方を整理させていただきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

資料1の1ページに中高一貫教育校の今後の在り方について、3ページに多部制定時制課程の今後の在り方について、5ページに総合学科の今後の在り方について説明してありますが、これらにつきましては、前回説明いたしました現状並びに県民意識調査のアンケート結果についてまとめたものがございます。それぞれの項目の右下のところに課題とありますが、これにつきましては皆様からいただきましたご意見について、課題という形で記載させていただいております。

次に7ページでございます。このページにつきましては、新たな特色を持つ学校・学科ということで、前は、普通科、農業学科、工業学科というような既存の学科について整理して説明させていただきましたが、今回は、文部科学省で整理している資料に基づき、他県で設置されております様々な特色ある学科の状況を提示させていただきました。

それぞれの学科についての説明は省略させていただきますけれども、項目として「課題解決・探求型の学習を重視した学科」「複数の専門学科を学ぶことが出来る学科」「キャリア教育を重視する学科」「特定の専門学科(1)(2)」について記載しております。例えば8ページの下の方にあります、「福祉科」とか「教育みらい科」というような学科、9ページでございますが、富山におきましては「くすり・バイオ科」とか、それぞれの地域で特色ある高校をつくっているような状況がございます。資料1につきましては以上でございます。

荒井会長 後ほど総合的に議論する機会もございますが、ただいまの説明の中で特に聞いておきたいということがございましたら、5分か10分ぐらいの時間を取りたいと思いますが、いかがでしょうか。

西山委員 質問じゃなくてもコメントでもよろしいですか。この資料1に関する感想でもよろしいですか。

荒井会長 そうですね。短めであれば、どうぞ。

西山委員 資料を見た感想ですけれども、前回も同じコメントがあったのですけれども、この

資料のそれぞれの一番下の方に中学2年生、高校2年生、保護者、県民、中学進路指導主事と分けて、「評価しない」「あまり評価しない」の割合が出ていますが。これは前回の議論にもありましたけれども、やはり中学校進路指導主事の数字の出方が期待とは違っていています。本来であれば生徒あるいは保護者の平均値ぐらいの数字が出ていけばいいと思うのですけれども、一番はじめの中高一貫教育校の今後の在り方については突出して「評価しない」「あまり評価しない」という数字が多かったり、あるいは次の定時制課程については逆に「評価しない」が一番少ない。それから、総合学科の今後の在り方についても「評価しない」の割合が高い。

意見が違うのは、中学校進路指導主事の方々には情報が相当あるので、一般の人が気づかないようなことを詳しく知っているからなのかなと思ったのですけれども、6ページの〈各評価の選択の理由〉では「わからない」のところで「現場や生徒の様子を見たことがない」というコメントがあったりすると、どういうことだと思ってしまう。

関連して気づいた点があるのですが、それは後で述べたいと思います。

荒井会長 これについては、後ほどご回答をいただきたいと思います。

高橋委員 中高一貫校について質問をさせていただきたいと思います。今後県の教育委員会として、さらに中高一貫校を推進していく方針であるのかどうかというのが一点。それから、古川黎明中学校として、併設型の県立中高一貫校がございしますが、これに県の中学校のモデル校的意味合いを持たせるのかどうか。または、モデル校的につくっていくのかどうか。この辺をお尋ねしたいと思います。というのは、現在新学習指導要領を受けて、来年度以降のカリキュラムの作製で中学校の現場ではいろいろ悩んでおります。喫緊な例で、古川黎明中学校で45分7時間授業ということで実施されていますが、一般校では50分授業6時間というのが普通でありますので、そういったことが可能なかどうか。これは中高一貫校だからできることなのですけれども、黎明中学校がモデル校的な意味合いがあるということになると、一般の中学校でもどうしてもそのように流れがちになるものですから、そういった意味合いからの質問でございます。それから、もう一つ、中高一貫校がいろいろ考えられているわけですが、地区における、公立中学校と中高一貫校のバランスについて、この後にも論議されるかと思いますが、地区内でいろいろな混乱があるようにも聞いておりますので、県として方向性がもし決まっていれば教えていただきたいと思っております。

荒井会長 今簡単にお答をいただけますか。後でまたこれに関連して議論を進めたいと思いませんけれども。

安住室長 先程申し上げましたように、前回の審議会でも中高一貫校などについてご意見をいた

だきましたので、本来は今回事務局としての考え方を提示すべきところなのですが、地区ごとの状況を含めた形で今回議論いただいてからの提示という形で考えております。

高橋高校教育課長 県立中学校を管轄している高校教育課ということで、市町村立中学校のモデルとして考えるかどうかということについてお答えを申し上げます。

古川黎明中学校、高等学校は併設型の中高一貫校ですので、当然その点が大きく市町村立の中学校とは異なっております。ですから、古川黎明中学校の全てをモデルにするということは当然できないわけですが、市町村の中学校でも使えるところはどんどん活用していただきたいと思っております。そういった意味で授業研究会であるとか情報をできるだけ多く提供させていただくようにしているところでございます。

それから、地区におけるバランスのご質問がございました。これについては大変重要なところだと考えております。そういった意味である程度生徒数が多い大崎地区、そして2校目は仙台地区ということで開校を計画してきた経緯がございます。今後とも地区のバランス、生徒数の問題が大変大きいかと思っておりますので、その辺は十分に検討させていただきたいと思っております。

白幡(洋)委員 質問が三つあります。一つは西山さんがもう既になさっているからよろしいかと思うのですけれども、もう一つ同じような質問で、前回もいろいろ議論がありましたが、アンケートを配られた人たちが高校教育をわかっている方とわかっていない方があって、意外と情報が伝達されていないのではないかという話がありました。そういう視点から考えると、アンケート結果の分析の中で、例えば中高一貫校でも総合学科でもそのエリア、実際にそこに通っている保護者の方々、あるいはその地区の中学校の進路指導に当たるの方々ということを少し分けて分析してみますと違う結果が出てくるのではないかと。まだまだ中高一貫校も総合学科も学校数が少ないので、皆さんが一般論で頭の中で考えて話していて、実態を踏まえて話していない方もいらっしゃるのではないかと。実態がよくわかっている、いわゆるその付近の1時間以内でお子さんを通わせようと思っている保護者の方々はどう考えていらっしゃるのかとか、実際に通っている方々はどうかということ、データの中で分析されて提供していただけたらもっと実質的な議論ができるのではないかと。ということで、そういうデータの分析の計画があるかどうかという質問が一つ。

それから、今回資料をいただきまして、非常におもしろく読ませてもらいましたが、先ほど説明がありました7ページ目で特色を持つ学校・学科とありました。不勉強で申しわけないのですけれども、こういう各県の教育委員会の自由度というのはどこまであるのかというのがわ

からないで議論してはいけないと思うのですけれども、そのへんのところをご教示いただければと思います。以上です。

荒井会長 今ご質問のあった点について簡単をお願いします。含めて中学校進路指導主事の件についてもお願いします。

安住室長 前回の資料の中に一部地区ごとに分析した資料があります。例えば、中高一貫校の関係については、地区ごとに集計していますが、総合学科等では地区ごとにうまく分析していないものもありますので、そこは検討していきたいと思います。

自由度の関係でございますけれども、義務教育と違いまして基本的には高校教育関係につきましては、県の教育委員会の自由度は高いと考えております。

高橋高校教育課長 補足をさせていただきますと、この7ページから9ページまでかなりバラエティに富んだ特色のある学科名が配置をされております。こういった形で各県の裁量はかなり幅が広い状況でありまして、学科によって勉強しなければならない科目は決められており、最低限やらなければならないものはあるわけですけれども、それに加えて県の教育委員会の裁量で科目を開設することもできるので、かなり自由度はあるということでございます。

荒井会長 条件緩和みたいなことはありますか。

高橋高校教育課長 学科ごとに学習すべき科目は決められていて、卒業までに74単位を修得するというのが最低のベースでございますが、そういったものをクリアすれば、その上については、学校ごとに盛り込んでいくことが可能だということでございます。

北島委員 これからの議論の流れが見えないので一点だけ先に教えていただきたいのですが、1ページ目に中高一貫校の現状の中で、古川黎明中学校の出願倍率の推移、この春のデータまで載っておりますけれども、黎明中学校卒業の1回生が高校1年生に既になっていると思いますので、1年前の古川黎明高校の倍率、それから、今回高校においては予備調査が行われておりますけれども、市立なのでよそのこととはいえ青陵中等教育学校の前期課程、それから後期課程、古川黎明高校のこの春の予備調査のデータも教えていただけると比較検討ができるのかなと思いますので、よろしく願いいたします。

高橋高校教育課長 済みませんが、今手元にデータがないものですから、お時間をいただいて後ほどお答えをさせていただきたいと思います。

## (2) 生徒数減少に対応した高校配置の在り方について

荒井会長 それでは、幾つかご意見をいただきましたが、資料1に関しての簡単な質疑につきましてはこれで締め切らせていただきまして、資料2の方のご説明をお願いいたします。

安住室長 では、資料2につきまして説明させていただきます。表紙囲みに書いてありますけれども、資料2の中身につきましては「学校の規模について」と「地区別の学級の見通しと高校配置の現状について」、「生徒減少に対応した学校規模の考え方」という三つの内容を示しております。

まず、学校規模についてでございますが、1ページをお開きいただきたいと思います。左上に平成20年4月現在におきます学級規模別の県立高校の数を分校を除いて示しております。現在最も多いのは7学級の学校が17校ございます。現構想におきましては、再編対象としてるのが2学級以下でございますけれども、2学級の高校は5校ということになっております。そのうちの1校である、鶯沢工業高校につきましては平成21年4月から岩ヶ崎高校と統合するという状況になっております。

次に、地区別の状況でございますが、2ページをお開きいただきたいと思います。上段は平成13年度、現構想がスタートした時点の各地区の高校の配置の状況を示したものでございます。左側に学級数と書いてございますので、ここにある数を横に見るとどの高校が該当するかわかるようになっております。

下の方は平成20年4月の状況を示したものでございます。これを見ますと、先ほど言いましたように宮城県で一番多いのが7学級規模の高校が17校という状況になっておりますが、7学級以上の高校があるのが仙台地区と気仙沼地区、気仙沼地区につきましては気仙沼高校と県立浦高校が統合しましたので7学級になっていますけれども、二つの地区に限られているという状況でございます。

この表の一番下の方に一校当たりの平均が5.17学級となっておりますけれども、各地区別に見ますと、仙台地区の中部(南)と中部(北)が6.7学級ということで、ほかの地区につきましては4学級または3学級というのが平均の学校規模という状況でございます。

前のページにお戻りいただきまして、学校の小規模化が学校に与える影響という資料を示しておりますが、この資料の出典は滋賀県教育委員会がまとめたものでございます。これはメリット、デメリットの観点から分類しておりますけれども、全体的に言えることは、高校教育につきましては社会に出る前の段階ということで、多彩な教育内容とか人間関係の構築が求められているわけでございますけれども、小規模化した場合については教育内容、人間関係の上でその機会が狭められるというような影響があるということが示されております。



それぞれの内容でございますが、4ページをお開きいただきたいと思います。このページにつきましては、学校規模別の開設科目について説明しております。普通科、専門学科、総合学科、定時制という形で書いておりますけれども、普通科については7学級、6学級、4学級、3学級、2学級という形でその区別を示しております、丸で示したものが開設科目でございます。数字で示したのは配置されている教員数でございます。学級規模が小さくなりますと、地歴公民及び数学、理科等におきまして開設科目が少なくなっていく状況が見られます。

次に、5ページでございますが、これにつきましては学校規模別の開設部活動数と図書館の蔵書数について示したものでございます。部活動は、高校生活に大きな位置を占めるものでございますけれども、中段にグラフがありますように、開設部活動数は学級規模に比例しております。

次に、その下のグラフですが、これは蔵書数でございます。これは部活動の数ほどきれいな傾向を示してはおりませんけれども、やはり学級規模が小さくなれば減少してしまう傾向が見られます。

次に、6ページでございます。これは学校の運営費について学校規模別に見たものでございます。右側の方に金額を示しております。単位は千円でございますが、これは教員の給与も入れた形で計算しておりますが、8学級の規模で学校運営費は3億8,400万円、1人当たり約40万円という形になっております。下のグラフを見ていただきたいと思います。学校の運営に当たりましては規模の大小にかかわらず一定の固定費がかかることから、学校の規模が小さくなるにつれて1人当たりの運営費が増加するという傾向が見られます。2学級の学校の1人当たりの運営費につきましては、7学級の約1.5倍の経費がかかっているという状況でございます。

3ページに戻っていただきたいと思います。これまで説明した状況等によりまして、各県で高校教育を行う上での望ましい規模を示しておりますが、宮城県におきましては6学級を一つの適正規模という形でこれまで整理してきたところでございます。他県につきましては大体4から8学級が望ましいと示している状況でございます。以上が学級規模に関する説明でございます。

次に、7ページをお開きください。各地区の説明に入ります前に、中学校卒業生の推移と進学にかかわる地区間の移動の状況につきまして説明させていただきます。上の表でございますけれども、各地区間の中学校卒業生の見通しを平成22年から平成32年まで、各地区別に示しております。トータルでいいますと、平成22年から平成32年の間に全体で3,184人

の減少が見られるという状況です。

次に、真ん中の表でございますけれども、高校進学に当たりまして、各地区間の進学の状況をまとめたものでございます。左側の地区が出身地区を示しております。上の地区が進学先の高校が所在する地区を示しております。例えば、左側の南部地区でございますけれども、南部地区内に進学した生徒が1,449名で、中部南地区には158人が進学しているという状況でございます。右側の二つ目の欄になりますけれども、南部地区から地区外に261名の生徒が進学しているという状況でございます。

これに対しまして、上の項目の南部地区の状況でございますが、例えば中部南地区から223人の方が仙南地区の高校に進学しているという状況でございます。一番下の転入計となっておりますけれども、他地区から仙南地区の高校に転入する方が255人という状況となっております。このように見て参りますと、大きく転出している地区は、仙台の北部でございます。中部北地区と登米地区、石巻地区であることが分かります。

次に、下の表でございますけれども、上の二つの表の中学校卒業者の動向と地区間の移動、また全日制課程への進学率、私立高校への入学者数等を踏まえまして、今後の各地区の必要学級数を試算したものでございます。平成21年から平成32年までを示しておりますが、全県で約50を越える学級減が必要だという見通しでございます。以上が全体の今後の状況でございます。

次に、8ページからは各地区の状況になります。まず、南部地区の状況でございます。下の表でございますが、全日制高校が分校を含めて11校でございます。学科構成でございますが、右上のところに「定員の学科別の構成比」と書いてございまして、体育科や看護科、総合学科という多様な学科を持っている地区でございます。また、白石と白石女子が平成21年4月に統合することになっておりますし、全日制的分校であります川崎校があるという状況でございます。先ほどの試算では今後9学級の学級減が必要になる見通しでございます。

次に、10ページをお開きいただきたいと思います。中部地区の状況でございます。各学校の状況につきましては10ページと11ページにまたがっておりますけれども、中部南・中部北、合わせまして仙台市を中心として全体で31の高校が設置されています。

学科別構成比でございますけれども、11ページ上に書いてありますが、普通科の割合が74.5%になっておりまして、普通科の割合が大変大きくなっております。これに加えまして、私立高校もほとんどが普通科という状況でございますので、普通科の構成比が高い地区でございます。

先ほど示した試算では10学級の学級減という数字が出ておりますけれども、全体の学級数に比べますとそれほど大きな数字ではないと思います。これまでは、大きな再編が行われていない地区でございますが、平成20年4月には、宮城第二女子高が併設型中高一貫校に、また塩釜高校と塩釜女子高が統合されるということになっております。

次に、12ページでございますが、北部の大崎地区の高校の状況でございます。現在は11校体制でございます。このうち3学級以下の高校が5校ということですが、平成21年4月には、もう1校が3学級以下になるという状況でございます。特に、遠田郡におきましては、2学級規模の高校が二つという状況でございます。先ほどの試算におきましては8学級の学級減が必要という見通しでございます。

次に、北部の栗原地区、14ページでございます。ここにつきましては現在5校になっておりますが、平成21年4月には鶯沢工業高校が岩ヶ崎高校に統合され、鶯沢校舎となることになっております。今後も生徒数は減少する見通しになっておりまして、試算では平成32年の必要学級数が12学級ということになっておりますので、今後どういう形の普通科教育、専門学科教育を提供していく体制をとっていくかということが課題となると思います。

次に、北部の登米地区でございます。ここにつきましても栗原地区と同じように、現在5校体制になっておりまして、現在は2学級規模の高校が1校でございますが、平成21年4月にはもう1校が2学級になることになっております。試算では平成32年の必要学級数が13学級ですので、栗原地区と同じように、この地区の高校教育をどのように行うかという状況でございます。

次に、18ページでございます。東部の石巻地区でございますけれども、石巻地区につきましては石巻市立の高校が2校ありますので、全体で12校あります。現在、石巻市立の2校の在り方について石巻市の教育委員会で検討が行われておりますので、その状況も見ていく必要があります。また、平成21年4月には現在の河南高校を総合学科に再編するということになっております。

次に、20ページでございますが、東部の本吉・気仙沼地区でございます。ここにつきましては現在公立高校が5校設置されております。平成32年までの生徒減少の割合が最も高い地区でございます。試算上は7学級の学級減が必要な見通しでございます。また、地区内の状況として、南側の志津川と北側の気仙沼では距離が長いという状況がありますので、その辺のところも考えていく必要があるというふうに考えております。

以上、簡単でございますけれども、各地区の特徴的なことだけ説明させていただきました。

次に、資料の22ページでございますが、これまでの宮城県の生徒減少に対応した考え方をまとめたものでございます。また、法律関係のこともまとめておりますが、「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」という定めがございます、高校教育につきましては、規模について、本校におきましては240人、実際には各学年2学級規模になりますけれども、それを下らないことと、分校につきましては100人を下らないことという下限が決められております。

現在の宮城県の考え方としましては、下の囲みの方に示してございますけれども、対応方針の1ということで、入学者見込み数の動向を踏まえ、学級減を行うことと、対応方針の3でございますけれども、適正規模と考えている6学級規模の高校を各地区に配置するとともに、地区の状況によっては6学級未満の高校も配置すること、原則として1学年1から2学級規模の高校は再編を進めるという形の方針を示しております。

また、具体的な再編の基準としまして、平成16年に、2年間連続して全学年の在籍生徒数が収容定員の3分の2未満、かつ160人に満たない場合につきましては、翌年度から募集を停止するという基準を設けております。また、分校についても募集停止の基準として資料に書いているとおり定めているところでございます。

最後に、23ページの表でございますけれども、東北各県の再編の基準を示しております。宮城県の場合は、募集停止という基準になっておりますが、各県の基準では、学級減、統合化、分校化、校舎制化、募集停止というような段階的な基準を設けているということでございます。

以上説明してきましたが、簡単にまとめますと、高校の再編・統合に当たりまして、その教育内容、部活動、学校運営の効率性を考えますと、ある程度の学校規模が必要だということから、本県ではこれまで6学級というのをその基準としてきたというところでございます。また、生徒数の減少でございますけれども、今後の生徒数の減少及び各地区の状況を見ると、中部地区のように公立校31校設置しているところと、地方では5校体制となっておりまして、その維持も難しい状況になっている地区があるという状況でございます。このような中で生徒のニーズにどう応え、どういう教育を行っていくのが課題となっているところでございますので、ご議論をいただければと考えております。

荒井会長 ありがとうございます。実態についての詳しい調査でございますので、目で十分に追い切れないところもございますけれども、とりあえず今ご説明のありました資料2について、県全体の配置や規模についてご意見あるいはご質問をいただきたいと思っております。

白幡(洋)委員 質問ですけれども、最後にご説明いただいた資料の「校舎制」についてご

説明いただきたいのが一つと、それから今回少子化による人口減に関連して、いろいろと予測なさっていますけれども、全県一学区になるということとの関連でどのような予測をなさっているかについて、もしあればお聞かせ願いたいと思います。以上です。

安住室長 校舎制という制度につきましては、法律上に示されている考え方ではございません。法律上にあるのは、先ほど書いておりますように本校、分校ですが、校舎制については、本校と本校とは別の校舎がひとつの高校になっているというのが一般的な考え方でございます。

高橋高校教育課長 全県一学区化に伴う予想についてどうかという、ご質問ですが、これにつきましては、現在3%の範囲で学区を越えて出願ができるというシステムになっておりまして、それをもとにシミュレーションをしておりますが、現状の3%の活用状況を大きく越えることはないであろうと予想しております。実際、今回の予備調査の段階でも3%の活用状況は3%の上限いっぱいまではなっていない状況でございます。

それから、先ほどの中高一貫校の数字でございますが、古川黎明高校の昨年の予備調査の倍率は0.89倍でございました。この春の予備調査は1.15倍ということになっております。仙台市立の青陵中等教育学校の高校部分の予備調査は0.42倍。中学部分については6.31倍でございました。以上でございます。

荒井会長 6.31倍は青陵中等教育学校の方ですか。

高橋高校教育課長 はい。青陵中等教育学校の中学校部分でございます。

荒井会長 古川黎明中学校の倍率はいかがでしょう。

高橋高校教育課長 古川黎明中学校は3.16倍でございました。

荒井会長 それでは、先ほどの質問にもお答えをいただきましたが、これから少し時間をとって自由にご議論いただきたいと思います。資料1にしる資料2にしるかなり豊富なデータがありますので、この読み込み方も含めていろいろなご意見があるかと思えます。全てにお答えが出てくるかどうかわかりませんが、いろいろな角度からの質問をいただきたいと思えます。

渡辺委員 新たな特色を持つ学校・学科ということで各県が取り組んでいる事例が示されていますが、実際どの位のニーズがあるのかということが気になっております。希望倍率が何倍なのかというところを調査すればニーズの広がりも解るのではないかなと思えますが、県としては現状を踏まえて、どのようなニーズがあるかについて考え方があればお聞かせ願いたい。

もう一つは、昔企業城下町ということが言われたことがあるのですが、セントラル自動車がある、更にエムセテックも来て600人位を雇用するという話であり、そういったところをど

のように捉えているのかということでもあります。今のところは、会社の移転に伴いほとんどの皆さんが宮城県に入られるというような情報のようです。お子さんのいる方も家族と一緒に来られるかどうかはわかりませんが、その辺をどう捉えているのか、結構大きな問題になってくるのではないかという感じがしています。その辺をお聞かせいただければと思います。

高橋高校教育課長 新たな学科ということで総合学科がありますが、宮城県におきましては総合学科についてはこれまで高い人気を継続してきておりました。ただ地域によっては倍率が下がってきているところもございます。そういったことでその下がってきている地域の状況の分析などをさらに進めていかなければと考えております。ただ、生徒の数が全般的に少なくなっているものですから、全体として倍率は低下傾向にあるというふうに考えております。

それから、企業城下町としての高校の在り方というご質問でありましたが、ものづくり企業の立地が進んできているという状況がございまして、担当課としても、ものづくり人材の育成ということに重点を置かなければならないと考えているところでございます。そういった意味で、来年度黒川高校をモデル校として、ものづくり人材の育成についてさらに研究をしていくということとあわせて、平成22年度から黒川高校において工業学科のクラスを一つ増やすということで準備を進めております。その一方で、県内全体の地域バランスということもありまして、仙南、仙台、仙北、石巻、気仙沼とそれぞれの地域でものづくり人材をどのように育成していくかということについては、さらに検討が必要だと考えているところでございます。

渡辺委員 特に総合学科ばかりではなく、この資料を見せていただくと特色ある学科があって、そういうニーズがそれぞれ個別的に高いのであれば、全体的には少子化であります。個性を伸ばす面でそういう学科の創設も必要なのではないかなと思ったものですから質問をさせていただいたところです。

また、企業のニーズはどこにあるのかということもありますが、やはり人材育成ということもあって、それぞれ個性を伸ばさなくてはいけないのが高校教育なのだろうと思っております。その辺のニーズを把握しながら、皆さんが目的・目標を持てるような教育の在り方が問われてくるのではないかと思います。漠然と大学まで入っても目標も目的も持たない人でいっぱいになる、そういう状況ではうまくないと思います。高校に入れば必ず目的・目標が持てるような教育が出来ればと考えますので、ニーズ等も含めて在り方を考えていただければと思います。以上です。

井口委員 時代のニーズに合わせて多様性を持つ高校、またいわゆる適正配置ということは非常に重要だというふうに思いますが、人口減が進む中で小規模校の再編というのはある面では

やむを得ない面もあるかもしれませんが、やはり当然のことながら公教育の役割ということ考えた場合に、一律に全て再編というのは乱暴ではないかと思えます。高校の存在というのは地域によっては相当長い歴史があってその地域にとってはシンボリックな存在であったり、地域によってはまちづくりの根幹に関わる問題であり、現に住宅政策を進めるにしても、あるいは企業誘致でもそうなのですが、渡辺委員からお話がありましたとおり、実際に企業を誘致して実際にその社員の人たちが定住をするためには、やはり高等学校の進学の問題というのは非常に大きなポイントを占めるということでもあります。この問題は当然のことながら純粋に教育的に考える必要があるということもそうですけれども、過疎対策だとかそういう面にも相当関わりがあるということですので、専門の皆さん方のいろいろご意見等をいただきながら、そしてまた一方では県土づくり全体に関わる問題だということで、そのあたりも踏まえながら進めていただきたいというふうに思います。

白幡（洋）委員 先ほどの渡辺町長のお話は、どちらかという人とを送り込む側から見た、どのような教育をすべきかというお話であるかと思うのですけれども、今後10年とか15年のスパンで考えたときに、産業集積の面で今の誘致企業だけではなくて今後もいろいろな期待があり、そのときに住民誘致という面で子弟の方々がどのくらいこちらに来られるのか。そういう方々のニーズはどうかということ、少子化で減ることばかり考えるのではなくて、住民を誘致するという視点から、魅力的な教育環境をつくるということもやっていかなければいけないと思います。この辺の視点はもう少しみんなで議論していきたいという気がします。

それから、今日二つの資料を見せていただきまして、これは個別に議論する話ではなくて、まさしくこの二つが非常にリンクしているし、それから産業集積の関わりという、企業戦士というのは余りいい言葉ではないですけれども、そこに送り込むということは個別の話ではなく全てがリンクしているという視点で話をしなければいけないのかなという意見でございます。荒井会長 他にはいかがでしょうか。

西山委員 私も意見ですけれども、渡辺委員からあったお話は極めて重要なことだと思うのですけれども、やはりこの宮城県の公立高校の教育をトリガーにして社会増を促進していくことができれば極めて素晴らしいことだと感じました。

それで、資料1と資料2についてコメントをしたいと思うのですけれども、まず資料1ですけれども、総合学科の評価で、「とても評価する」「評価する」を足すと62%になって、定時制が大体61%だと思いますので、非常に評価が高い。ただ、各評価の選択理由を見ると説得力のある決め手が書いてあるわけでもなく、漠然と期待しているというふうに思いました。

それで、その後の新たな特色を持つ学校・学科をざっと見てみると、私なりに関心を持ったのは京都の南陽高校の「サイエンスカフェ」とか、八戸の平田オリザさんが来てやっているという「表現科」に関心を持ちました。「サイエンスカフェ」については東北大学の協力を得ればすぐにでもできそうですし、この「表現科」というのは確かに結構学生が楽しんで説得力のある非常におもしろいことができるのではないかなと思って関心を持ちました。

このような例を参考にして特徴を持たせ、宮城県の総合学科に入るとこんな質の高いプログラムが提供されるということができれば、先ほどの社会増なんかにもつながっていく可能性があると思います。また、私としては、こういう技術的なことも非常に重要ですが、やはり産業競争力に資するものでマーケティング戦略とか知財戦略に関わるようなそういう話を聞ける場があるといいかなと思いました。例えば比較的わかりやすい事例ですと、太宰治の「人間失格」の表紙を「デスノート」の漫画家に描いてもらったら、たった1年間で10年か15年分の売り上げがあったということで、これはマーケティング戦略でいえば4Pの製品戦略のパッケージ戦略の部分に当たるわけですが、そういうようなことを学べる場というのは非常に関心を持たれるのではないかなと思いました。

それから、私の場合、白石高校卒業なので近くにソニー白石セミコンダクタというところがあって、そこはソニーの光の最先端のことをやって全国を渡り歩いている非常に優秀な方々がいらっしゃる。そういう方々のネットワークをこういう場を通じて結ぶとか、東北リコーにも全国で活躍している方がいるので、そういう方をうまく高校教育に取り込んでいくということが重要ではないかと資料1に関して思いました。

それから、資料2に関しては、三つほどコメントをしたいと思いますけれども、一つ目は非常に細かい話で恐縮ですが、7ページの資料ですが、これはできればパーセンテージも入れてもらおうと、もっとリアルに考えられると思いました。二つ目は下宿をしている方もいらっしゃるのではないかなと思うのですが、私が白石高校に行っていたころは川崎町から来ている方は大体下宿をしていたので、それで、高校がないから地域が疲弊してしまって社会減が起きるといふような状況になってくるとするならば、例えば下宿をする家庭に対する補助であるとかそういうものがあったらいいのかなと思ったりしました。あとは、高等学校だからないとは思いますが、スクールバスの状況などを教えていただきたいと思います。荒井会長 事務局でお答えいただける部分があればお願いします。

高橋高校教育課長 スクールバスの件ですが、学校によっては保護者がお金を出し合ってバスを運行するというケースはあるかと思います。ただ教育委員会でスクールバスを用意している



ということはこれまではございません。それと、下宿をしている生徒の数字の把握は、教育委員会としてはしておりません。

荒井会長 学区が大きくなったときに、これから増えるのかもしれませんがね。

先ほど最初に西山委員の方からご質問がありましたけれども、全体に中学校進路指導主事の方のご意見が比較的ネガティブなところが多いという件に関しては何か補足的な説明がございませんか。

安住室長 総合学科についても否定的な意見が多いのですけれども、総合学科という学科の形式で見ているのか、特定の高校の特色ということで見ているのかということところがなかなか区別がつかないところがあります。

高橋委員 中学校の進路指導主事が特に中高一貫教育について否定的なものが多いということについては、結局中学校の教員は中高一貫校への進学ということについては関わっていないわけです。小学校の先生方が実際にかかわっているわけで、よくわからないということは一つあると思いますし、それから古川地区の校長先生方にお話を伺ったときには、これがよいかどうかというのはまだ考えも分かれるところなのですが、各小学校における優秀な子どもたち、つまり各公立の中学校におけるリーダーになるべき子どもたちが集約されてしまうということで非常に困るんだという話を前に聞いたことがございます。そういったことで、だから古川黎明がだめなのだということではないのですけれども、そういった意識の確執みたいなものはあるだろうと思います。

それから、進学という方向性でつくられた高校に付随する中学校ですから、選択の理由にも書いてあったかと思いますが、進学一辺倒の学校になってしまうのではないかというようなマイナスイメージが出ているのではないかと考えます。

白幡（洋）委員 一つ話し忘れたのですけれども、前回にも発言させてもらいましたが、単なる意見ですけれども、高校を統合していかなければならないという中で、ならばこそ中高一貫校にして、そして中高一貫校を推進するならば、だからこそ総合学科にしたいなと思っています。その中に進学を目指すコースがあってもいいし、工業系あるいは商業系があってもいい。それだけで終わるのではなくて、やはり自分の適正を見極めて途中から専門の工業高校に行ってもいいし商業高校に行ってもいい。あるいは高専に行ってもいいというようないろいろなパスがあるような総合学科にしていくべきではないかと考えています。

確かに高校受験がなくなることのデメリットがあるかもしれませんが、それ以上に一貫して、先ほど部活動の話もありましたけれども、部活動に力を注ぐ時間が割けるということ

は、やはりこの時代の子どもにとっては大変メリットなのではないかと思っています。

自分の会社の話をして申しわけないですけども、ベガルタ仙台はご承知のようにジュニア、ジュニアユース、ユースと持っています。もちろん年齢ごとにカテゴリーが違いますが、優秀な選手は上のコースに入ると伸びます。下でお山の大将になっているとそこでとまってしまいますけれども、上の方にスキップさせますとそこでもまれてまた伸びていくということがあって、やはりその人が持つ個性を開花させることができるのではないかと。6年という中ではそういうこともできるし、先ほど下宿の話もありましたけれども、1時間以内で通学するためには学校として今後寮を完備していくということも、実はベガルタも寮を持っていますけれども、そういうことも必要なのではないかと。そういう中で生活習慣等もきちんと、本来は家庭でやることですけれども、学校でもある程度厳しく指導していくというようなことも、私としては中高一貫校にしてそこを総合学科にして、出口はいろいろなバラエティに富ませるといった方がいいことなのかなというふうに思い続けております。以上です。

荒井会長 全体に関わっていかがでしょうか。

木村委員 中高一貫教育についてですけども、意見と質問をさせていただきたいと思います。

まず質問ですけども、市立の高等学校再編ということで今石巻市の方でも議論がなされておりまして、先日もありましたが、同窓会などからいろいろなご意見がありましてなかなか進みにくいところが出ております。そういう中で実際に今回の高校受験の倍率とかを見ても若干希望の方が減っているところがありまして、それがまた危惧されるところです。というのは進学率であるとかそういったところの影響があったり、また就職の厳しい状況から見ても、いろいろ親御さんとか生徒さんも選ぶ時代になってきているのだなと思っています。

石巻市でも中高一貫校についての議論がかなりされているのですけれども、そこで質問なのですが、今後例えば中高一貫校がニーズとして求められて増やしていかなければならない状況になったときに、今の市立の中学校を県立の高等学校との中高一貫校というようなことにするには何か手法があるのかどうか。それが可能かどうかということをお教えいただきたいと思っております。

それから、手法の部分ですけども、どうしても進学に偏った中高一貫校であるとか、どちらかというと学業に力を入れている部分があると思いますが、今回利府高等学校が選抜高校野球の代表校に選ばれて、私立だけではなくて公立でも甲子園に行ける可能性が出てきたということで希望がわいてきたところだと思うのですけれども、そういう中で例えば中高一貫校でスポーツに特化した学校づくりをしてみるといったことがあってもいいのではないかと。宮城県に

何か夢とか希望とか、これで何とか自分の夢を叶えたいと思う子どもたちが何かの方法で、スポーツでも美術でも結構ですが、そういった中高一貫校づくりというのもあっていいのではないかなと思った次第です。

なぜそう思ったかと言うと、野球に関して言いますと公立の中学校はほとんどが軟式野球の部活動しかなくて、硬式野球を本気で目指したい子どもたちというのは、スポーツ少年団またはリトルシニア、そういったことで学校以外のチームに入って練習をしている。だから中学校の部活動はほとんど出られないという子が多いです。石巻市は特に野球が盛んなものですから、そういった親御さんのご意見がありましたので、何かしら考慮した学校づくりがあってもいいかなと思った次第です。

荒井会長 最初の方の中高一貫校のご質問についていかがでしょうか。

高橋高校教育課長 市町村の中学校と県立の高校での中高一貫教育ですが、これは今宮城県だと志津川高校と近隣の中学校とで連携型の中高一貫教育ということでモデル校としてやっております。メリット、デメリットいろいろあるわけですが、併設型とは違う形で、石巻であれば石巻のある中学校と県立の高校が連携型の中高一貫教育を行うということは今のシステムの中でも可能でございます。ただ、設置者が異なるわけですので、その辺のやり方等については十分お互いに相談をしながらということになりますが、そういうシステムは現在でもあるということでございます。

それから、学力に特化しない中高一貫教育校という考え方も当然あるわけでありまして、学校のコンセプトとしてどういったものを重点として取り組んでいくかということでこれも変わってくるかと思えます。今申し上げました連携型の中高一貫教育の場合には、必ずしも学力だけに特化しないということで、今話題にありました部活動であるとか、あるいは生徒会活動であるとかを中高一緒にやることによって、年齢の幅のある中でいろいろな体験をし、学んでいくということもある。そういった報告を志津川高校からは受けており、学力だけに特化しない形の中高一貫教育という在り方も大変魅力のあるものだというふうに考えております。

高橋委員 中高一貫教育についてですが、義務教育のものとして考えたときに、やはり小中学校というのは地元、狭い範囲の生活圏の中で地元意識、郷土意識を育てていくということも将来的に大変大事なことだと思っております。確かにいろいろな能力、学力も含めてスポーツ、その他の能力に特化して育てることも大事かと思えますが、義務教育段階の子どもたちを、将来その地元を担う存在として育てるという意味からいうと、そんなに多くの中高一貫校ができて、子どもを取り合うような形になっていくことは望ましいことではないのではないかと考え

ます。先ほど県の方からも説明がありましたように、ある人口規模以上のところでやる。狭い範囲でやっていきますと子どもたちの集団を分断していくようなそんな恐れも感じますので、意見としてお話しいたします。

荒井会長 総合学科の在り方あるいは中高一貫教育の在り方等についていろいろなお意見を頂戴いたしました。前回の調査を踏まえてというところでも、またさらに踏み込んだ分析の必要ということのご指摘もあったわけですが、資料2の方で事務局の方からご説明がありました地域別のデータもかなり詳しいものがございます。これは議論し出すときりがないという部分もございますけれども、それぞれの委員の居住されている地域あるいはお子さんなりが通っておられる地域等のことも含めて、それを念頭に置きますとそれぞれの地域の特性について幾つかの論点が出てくるのではないかと思います。そのあたりについて地域別に見た、個別の地域だけに限定してというよりも地域間の対比ということを念頭に置いてご意見、ご質問等をいただければと思いますが。

佐藤委員 私は今年受験生を持つ母親ですが、今年は学区制があって来年から全県一学区ということになっておりますが、一人の親として今回の予備調査の倍率が大変気になったところであります。今回、今日の議題である、特色ある高校づくりということで、先ほどいろいろな全国の珍しい学校の学科であるとか、それから中高一貫校であるとかそういった話題が出ておりますが、意外と公立の場合は普通科というとその学校全体が均質の普通科になっております。どうしても私たち親からすると、以前に、大学の進学率をアップさせたいという話題が出ましたが、やはり中学校を出る段階ではまだ進学させたいか就職させたいかというのは、本当に親としても微妙なところではあります。いろいろ将来のことを考えると、進学をさせたいという親御さんが多いと思うのですが、そうすると専門学科に入学すると受験のときのデメリットがあり、幾ら特色があったとしても、いざその先の大学への進学というときには、大学の受験制度が変わらない限り、普通科に入れたいということになります。じゃあ普通科に入れるとなると、次は高校のレベルで決めてしまうところがあります。同じ普通科といっても仙台市内の進学校さんが勉強するのと郡部の普通科が勉強するのでは、全く教科書が違ってきます。進学を考えたときには、高校のレベルの少しでもいいところの普通科の高校を選ばせたいというのが多分多くの親御さんの考えているところではないでしょうか。そういうことになると、どうしても郡部の子どもの親は、実際に家から何分のところに高校はあるのにそこには入れないで、少し遠くでもいい高校に入れたいというのが一般的で、高校の普通科に対してのメスの入れ方というのをちょっと考えてもいいのかなと、今日の会議で思いました。

今回は特色あるということで、そういった学科とかコースとかの話題が出ていますけれども、例えば私立の高校さんですと同じ普通科でも特進があったり英進があったり、同じ普通科でもレベルが学校の中にある。同じようなことが、地元の高校の普通科にあれば、大学進学を考えたときに、選択肢の中にその高校が入ってくるのではないのかしらと、今回自分の子どもを進学させる上で思いました。例えば歩いて本当に何分のところに地元の高校があるのですが、私の中の選択肢にはその高校はありませんでした。確かにいろいろな企業の誘致があって、その高校に人材育成のプロの方を入れていくというようなことが新聞発表でありましたけれども、そういった就職のいい条件があったとしても、まだ選択肢の中にその高校は入ってきませんでした。そこにはまだ、就職した方がいいのか進学したほうがいいのか親自体の考えも決まっていな。するとその高校に入学した場合、大学進学を考えるととてもリスクが大きい。学ぶ教科書を見ると、ちょっと国公立を受けるレベルではないというところがあったりします。親御さんも、例えば複数学科があったとして、その学科になぜ入れたいかという、その学科の科目を学ばせたいからという意識で選んでいる方は大変少なく、レベルで選んでいる。県立高校の普通科であったとしてもレベルを違えた募集の仕方というようなことができないものかというのを今回考えた次第です。今回普通科については話題になっておりませんが、県立高校の普通科にもメスを入れることは、宮城県としての特色ある高校づくりの一つになるのではないかなと思いました。以上です。

荒井会長 今のご意見は普通科の進路多様校のような高校に対するご意見でしょうか。

他にはいかがでしょうか。

公平委員 先ほどの説明で、全県一学区になったときの影響という部分で3%枠の範疇での移動というような説明がありましたが、我々の地区では仙塩の方の高校に進路を考えたときに、北部大崎地区ですけれども、3%だから手を挙げないという子どもの数は非常に多くて、それを考えるとこれから3,000人の子どもさんが減少するということを考えますと、私の住んでいる北部大崎地区の高校は確実に統廃合の対象になるのかなというふうに見ておりました。

23ページの各県の対応という部分で、宮城県は本校の募集停止、分校の募集停止というような設定になっていますが、例えば福島県のような【校舎方式による統合】とか【小規模校の分校化】とかということも検討していただけないか、具体的に言えば、人気集中校の第二キャンパス、第二校舎みたいな形で、郡部の方の5学区の方にそのような基準を検討いただければと思います。以上です。

荒井会長 それでは、私から伺いたいのですけれども、全県一学区にして特定の高校に志願者

が集中したときに、定員は厳守するのですか。それとも多少の収容力の幅を持たせて志願者を受け入れるというような措置をされるのでしょうか。

高橋高校教育課長 全県一学区化について昨年から全県で合同相談会等を行いました。その際に、仙台に一極集中が起こらないように対応しますということで説明をしております。一学区制を決める段階でも、そうならない配慮をすることが条件となっております。あくまでも地域の生徒は地域で育てていくという基本的な考え方に立って、その上でどうしても仙台あるいはそのほかの地域のこの高校でやりたいという場合に、制限があることによってそれができないということはなくしましょう、という考え方で全県一学区化に踏み切りましたと説明をしています。その説明からいたしますと、仮に仙台の特定の高校の倍率が非常に高くなったということがあっても、だからといって募集定員を増やすということになると、これまでの説明と矛盾することになりますので、あくまでも募集定員については計画を踏まえて対応していくということであって、志願倍率が極端に高くなったので定員を増やすということはないというふうに現時点では考えております。

猪股委員 前回欠席させていただいたのですけれども、3%というのは、今地区間の移動に3%という制限があり、全県一学区になってそれが全部なくなるということですね。

先ほど佐藤委員がお話しされましたけれども、勉強したくていい大学に入りたい人はいい高校に行きたいというのは常で、スポーツであれば今宮城県の場合は私立の強い高校に行くような気がします。学区制を取り除いてしまうと多分優秀な子は、私が卒業した中学校の生徒は、小学校ぐらいから皆越境入学で来ていて、地区の子は全校生徒の半分もいないぐらいでした。多分、いい高校に行きたいので中学とか小学校ぐらいから転校してくる子が多くて、そういう状況になるのだろうということですが、勉強したい優秀な子はやはり切磋琢磨して伸びようと思っていい高校に行く。これは意見ですけれども、学区制を取り払ったことによってさらに地域の、例えばどんどん学級が減っているような高校ではもう経営が成り立たないような、県立なので経営とはちょっと違いますけれども、そのようなことが起こる懸念がありますので、その辺にどのような歯止めをしていくのが教育委員会の腕の見せ所のような気がします。とにかく親としても先ほどご意見がありましたけれども、やはり勉強させていい大学に行かせてというのは昔からで、今でもやはりある程度東北大とか東大とかに行く人は例えば仙台市内の進学校に行かせたいというのが親の心だと思いますけれども、その辺でどのように、学級が減っていくことに対して対策とか対応していくのか、お聞きしたいと思います。

高橋高校教育課長 現在取り組んでおりますのは、一つは各地域の拠点校、進学を重視した学

校、そういった学校への支援をここ数年続けてやっております。仙台市以外の白石ですとか石巻ですとか古川、気仙沼、あと幾つかありますけれども、そういった学校へのでこ入れ策ということで行っております。進学の実績も順調に伸びてきておりますので、そういったところで必ずしも仙台に来なくても国公立の大学を含めて進学は大丈夫ですよという形をつくりたいと考えております。

あわせて特色ある学校づくりということで、勉強だけではなくていろいろな、例えばインターンシップを強化するであるとかそういったいろいろな形で学校の個性を伸ばしていきたいという取り組みについても支援をしております。まだまだ一般の皆さんには見えてこないところも多いようであります、こちらの広報が不十分だと思っておりますが、そういった特色ある学校づくりを各地域でさらに進めていくということで取り組んでおります。何とかそういったことで仙台への一極集中が起こらないようにしたいと考えております。

猪股委員 もう一つ関連して、スポーツとか、例えば千葉県だと市立船橋とかスポーツが非常に強い公立高校があります。宮城県としてもそういうような方向性のある高校にしようという議論は出たことがあるのか、考えているのか、お聞きします。

高橋高校教育課長 先ほどご紹介いただいた利府高校ですが、スポーツ面での成果を着実に上げていると考えております。利府高校開設当初は普通科の高校でございましたが、途中でスポーツ科学科を設置しまして、体育に重点を置いた教育を進め、これまで取り組んできたところがございます。今回野球で甲子園に行くということになりましたが、これまでも陸上であるとかサッカー、そのほかの種目でも全国大会に出場しておりますし、県南の柴田高校にも体育科がありまして、柴田高校と利府高校が体育に関する学科を持つ公立高校として大変頑張っていると考えております。

荒井会長 他には。

白幡（勝）委員 全県一区制の話が出ておりますが、全県一区制というのはそもそもにおいて、個性を持った子ども、やりたいことをを持った子どもを全県的に集める制度だと思うわけです。そういう意味ではスポーツなどでは非常にいい話になるのですが、一方では定員を設けることで人数的には集中しないかもしれないけれども、質の高い子どもが特定の高校に集まるのではないかということは、やはり考えなくてはいけない要素であろうと思うわけです。しかしながら、今スポーツの例が出たように、そのこと自体は否定すべきものでもないだろうというふうに私自身は思っております。

それから、郡部に拠点となる高校がつくれ、そして実績が上がっているというのも大変力

強いことではないかと思っているわけです。先程、佐藤委員さんから普通科について全般的に議論されていないのではないかというお話がありましたが、それぞれの高校が特色を出しているというのが現実であろうと私は見ております。私のいる本吉郡ですけれども、各高校はそれぞれ性質が違っていると思っております。気仙沼高校、気仙沼西高校、気仙沼向洋高校、本吉響高校、志津川高校、いずれも非常に特色のある高校になっていて、それなりに地域に評価されていると思っております。それで進路に関して、中学の段階では進学なのか就職なのか決めかねている、そういう生徒は確かにたくさんいることなので、非常に大きく考えなくてはいけないことで、例えば就職をしたいと思っていて途中で進学に変わるという子どももままいるわけです。そういう子どもについて高校はどのように対応しているのかという話を申し上げたいと思っておりますが、私は教員をしまして4学級規模の高校を何回か経験しております。そういう高校では進学という流れは余り強くないですけれども、そういう中で就職を考えてきた子どもが進学をしたくなった場合は、その生徒は学校にとって非常に大事な生徒になってくる。ぜひとも伸ばしたい生徒になってくるようなところがあるわけです。そうしますと、その生徒のためにいろいろな手を尽くしてくれるという例が見られていたように思います。そういう意味では現在の高校の状況を見ると、余り心配は要らないのではないかと、そんなふうに私は思います。

従って、各高校で子どもたちの個性とか希望に応じて、途中で進路希望が変わってもフォローするような仕組みができあがってきていると思っておりますし、これからも大事にして行かなくてはならないと思っております。こういうことが広く多くの方にわかっていただくと安心してもらえると思っておりますし、このようなことが保護者にとって切実であれば、各高校がもっとこの辺を宣伝してわかってもらう努力が必要なのではないかと思っているわけです。

それで、県教育委員会に若干お尋ねしたいところがありますが、実は小規模校の問題ですけれども、小さな高校を統合したりして学校規模を大きくしようという動きがあると思うのですけれども、小さな高校を統合していても4学級クラスの高校が多々残るだろうと思う訳です。そうしたときに6学級とか8学級規模の高校に比べればデメリットが出てくるだろう、そのデメリットの中で最大なのが教員数が少なくて授業のやりくりを支障をきたす。非常勤教師とか講師しかいない教科が出てくる。教科指導そのものに関わる部分のデメリットが出てくるのではないかと思います。本日の資料には、データとしてすばらしいものが出ているのですが、肝心の小規模校のデメリットに関するようなデータが、データとして出しにくいところがあるだろうと思うのですが、出てきていないと思っております。その辺あたりをぜひ県教育委員会の方で配慮していただいて、小さな高校ほど様々な指導に対応するのが大変なわけですので、十分な



教員数が確保されるようお願いしたいと思っております。以上です。

荒井会長 お返事といえますか、ご返答があれば。

白幡（勝）委員 要するに小規模校に対する指導上のデメリットに対して、現在もう既に手を入れていただいているところもあると思うのですが、対応についてお聞きできればということ  
です。

安井教職員課長 学級数の減少に伴いまして、配置できる教員数が減少してしまうというご指摘でございますが、実際そういう教育上のマイナスの効果というところについても、この審議会でご審議いただく一つの論点になるかと思っております。私どもとしましては、できるだけ学校のご要望をお聞きしながら、教員以外のいろいろなサポートの職員も含めて、やっていきたいと考えて努力しているところでございます。基本的には各校に配置できる職員の定数というものが、生徒の数に応じた国の定めている定数がございまして、各県に定数配分されているということがございます。またそれ以外の職員ということもなかなか予算の状況もございましてかなり厳しい状況があるわけでございますが、やはり重要なご指摘だと考えておりますので、できる限りの対応について努力をしていきたいと考えております。

荒井会長 では、奥の方から。

佐々木委員 先ほど地域の拠点校にてこ入れを行っているというお話があったのですが、拠点校はほとんど心配ないように思っています。定員割れというときもありますけれども、問題は拠点校以外の高校だと思っておりますが、そういった高校では特色ある高校づくりをどのように具体的に進めていくかというのがすごく重要なことになってくると思いまし、校長先生は二、三年でかわってしまい、そうすると一貫してこういった方向に進みたいというようなものがなかなか定着しないということが心配される場所と思えます。そういった場合に、校長先生と先生方、教員の方々のコミュニケーションが、高校は小中学校と違って人数も多いですので難しいとは思いますが、とても重要なことで、そういったことも考えていかななくてはならないと思えますし、地元の教育委員会とかは全く県立高校の方は関係ないのかもしれないんですけども、地元の高校ということが先ほどからいろいろ出ていますので、市町村教育委員会なり教育事務所、そのあたりとの意見交換なりどういうふうにして地元の高校をつくり上げていくかというような場、部分的には可能かどうかわからないのですが、権利の委譲というか地元の教育委員会の方に任せるところは任せるといったことをやっていかないと、全県一学区になればさらに大変なことが起きるのではないかなという心配があります。

これまでいろいろとご説明いただきましたが、中高一貫教育にしても総合学科にしても共通

して言えることですが、メリット、デメリットというのをきちんと提示していかなくてはいけないと思っています。先ほどの各評価の選択理由というところで「わからない」とか「あまり評価しない」という部分に情報が少ないとか判断できないとかという記述がありますので、それだけに限らないですけれども、総合学科に関しては単位制ということできちんと自分で単位を取っていかないと、ともすると留年になりかねないということもお聞きしましたが、メリットだけではなくて、そのようなことをきちんと伝えていくということをしていかなくてはいけないのかなと思います。以上です。

木村委員 ちょっと数字で気になった点があるので教えていただきたいのですが、仙台のナンバースクールの現状をお伺いしたいのですけれども、進路状況の構成比グラフの中で、例えば仙台二高も国公立の進学率も多いですけれども、半分は専門学校に進学をしている。ほかの高校ですと、普通科ですが、むしろ国公立は少なくとも私立大学への進学が多いので、結果大学の進学率が多いように思います。それは下の方の全体の構成比にも出てきていますけれども、その辺がちょっと気になったので、もしかして例えば積極的に進学を勧めている高校でも、もしかしたら学校の勉強について行けなくなって途中で進学をあきらめてしまうとか、そういったような現状がないのかどうかということです。

それから、例えば石巻とか古川あたりの国公立大学の進路先構成比が5%と低いのですけれども、これは現時点でも私もいろいろ伺ってみますと、石巻も古川もアクセスがいいものから3%枠に積極的に挑戦をして、中学校でトップクラスの子どもたちは皆仙台の高校に進学するという現状が起きていて、これは多分これから一学区制になればなお傾向が顕著に現れてくるのではないかと感じています。

安住室長 仙台二高は予備校に行っている分を専修学校に入れているものですから、専修学校進学割合が多いということでございます。

本図委員 何回か欠席していて少々とんちんかんなところがあるかもしれませんが、三つのことを委員の皆さんにご提案申し上げたいと思います。一つは久しぶりに会議に出席しまして、この審議会は将来構想審議会ですが、再編と改革の間でどうも議論がぶれているような気がしまして、再編という少子高齢化の経済社会状況を踏まえた状況があり、再編をまったく否定するというものではもちろんないですが、再編を踏まえながらも、もう少し改革ということに意識を持っていく必要があるのではないかと、漠然としてはいますが申し上げたいと思いました。

それを踏まえましてもう2点申し上げたいのは、これまでの議論の中でもう既に解決していれば別ですが、これまでの宮城県の高校改革の評価といっても難しいと思いますが、どういう

ふうに改革の成果を捉えるかということをしちんとこの場で踏まえた上でないと、審議会がぶつ切りにいろいろなことを言っても説得力が出ませんので、これまでのことをどう評価した上で、総合学科がどうであるとか男女共学がどうであるとかということをしちんと踏まえた上で、課題別に例えばワーキンググループをつくって、何が課題で成果がこんな状況であるとか、あるいはそこで働いている高校教員から見た評価というのはどうなのかというようなことも、もちろん子ども、保護者も含めてですけれども、そういった改革の成果ということをしちんと踏まえるべきではないのかということです。

3点目としては、他県の状況、今日は京都なり岡山なりというところで新しい特色を持つ学校・学科という紹介がありましたけれども、他県の状況がどうで、何を踏まえて改革が進められて何につまずきがあるのかということも含めて調査し、他県の状況をそのまま宮城県に当てはめるということはもちろんできないですが、他県の状況をもっと知った上で将来構想を練ってもいいのではないかと思います。その際には、先ほども申し上げましたけれども、例えば総合学科にしてこうしてああしてと、現場を知らない人間が言うことも必要かと思えますけれども、高校教員がどういった改革の渦中であって何を考えているか、やらされ改革になっていなくて、ちゃんと主体性を持ってできているのかというような視点が大事ですし、これは議論の中にも出てきたことですが、地域とその高校との関わりというのがどうなのかということも他県を見るときに観点にしていきたいですし、何より仙台でも学校統廃合が進みつつあるのですけれども、そういった身近なところを踏まえましても再編した後の校舎の活用がどんなふうに、他県で高校が再編になった場合に行われているのかというようなことも観点の一つかなと思ひまして、そういったことを調査なりヒアリングなり、あるいは講師としてきていただいたりというようなことも含めて、勉強した上で議論していくのも一つかなというふうに考えます。以上です。

荒井会長 ありがとうございます。

西山委員 2点ですけれども、先ほど公平委員の方から分校化という話があって、これは非常におもしろいコンセプトだなと思ったのですけれども、例えば分校とすれば本校があるわけですから、そこを上手にインターネットを活用して遠隔授業を行う。そうすると今度は本当に本校と分校の授業のレベルが合っているかどうかという問題が出てくると思うので、そのときはやはり先生に頑張ってもらって、仙台に住んでいてそういうのは非常に得意な先生にインターネットを通じて質の高い授業を提供してもらおうというのが一つ考えられるかなというふうに思いました。

二つ目は、資料1の方に戻って、定時制についてですけれども、定時制で実際に昼間に仕事をして夜高校に通っている人というのは今何%ぐらいで、どういう推移できているのかがわかれば教えていただきたいと思いました。不登校の生徒の非常にいい受け皿になっているというふうなお話もありましたけれども、もしかすると定時制高校が今どういう状況にあってどういうふうに役に立っているかというのを議論していくと、わかりませんが、もしかするともう少しユニバーサルデザインみたいなコンセプトを入れていった方が、将来よりいい高校になる可能性もあるかなと思いました。以上です。

荒井会長 それでは、たくさんご意見を頂戴いたしまして、時間も大分押してまいりましたが、先ほど本図委員に久しぶりにご出席いただきまして根本的なご意見も頂戴しました。再編の問題に立ち入りすぎているのではないかというご指摘は、ある意味ではそのとおりかもしれませんが、これまで、個性的な高校をどういうふうにつくっていくか、あるいは中高一貫校、総合学科、あるいはそれ以外の特徴のある高校をどうつくるかということ、地域なりあるいは親御さんの方の希望と社会的な需要との関連で様々な議論をしてきたところです。

今日は、細かな資料をいただいてそれぞれ地域別あるいは学科別にお考えいただいた部分が多かったかと思えますけれども、十分にご意見をいただけなかった部分に関しては、またファックス等でご意見をお寄せいただいて、それを事務局の方でまとめをさせていただくというふうに思っております。

ただ議論そのものもこのままでいきますとかなり発散をしてまいりますので、次回あたりはかなり論点を収斂させて、一定の答申の方向性を打ち出すというふうな形に持っていきたいと思っています。ぜひご協力をお願いしたいと思います。それでは、事務局にマイクをお返しいたします。

### 3 その他

司会 長時間にわたりましてご熱心なご討議をいただきましてありがとうございました。

本日もたくさんのご意見をいただきましたが、まだまだたくさんのご意見があろうかと思えます。今、会長の方からもご案内がありましたように、お手元に前回までと同様、ご意見をいただく紙を用意してございます。これにご記入いただき、ファックスなり郵送なりで事務局の方までお送りいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

最後でございますが、次回の審議会の日程でございますが、資料3にスケジュール案をつくらせていただいております。予定としましては3月下旬を考えておりますが、詳細な日程につ

きましては会長と相談をさせていただきながら、改めて各委員の方にご連絡を申し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

資料3に一部訂正がございます。3月下旬の第6回目で予定しております議事といたしまして二つございますが、一つは本日に続きまして、生徒数減少に対応した高校配置の在り方についてということで、ここが になっておりますが、2回目ですので ということで引き続きやらせていただきます。続きまして、二つ目の議題としましては将来構想の推進等についてということで、最終段階の内容までご議論いただくという予定にしております。

#### 4 閉 会

司会 それでは、以上をもちまして、第5回県立高等学校将来構想審議会を終了させていただきます。大変ありがとうございました。